

今日は！
ニイハオ
你好

日本の大学教育から 感じたこと

社会科学研究所
博士課程後期

ZHANG
張
HONG
紅



私は日本に来てもう五年になります。この間、日本の皆様や大学の先生方が私たち留学生に対して大きな関心を寄せて頂いていることを身をもって体験し、心から感謝しております。

私が日本の生活を始めたばかりの時、言葉の問題や生活習慣の違いから来る戸惑いがありました。

そして一番困った時、大学の先生方がいろいろとお世話を下さったり、市民の皆様に行き届いたご配慮、またいろいろなお援助のお陰で、異国の文化などとの接触により生じたさまざまな困難を乗り越えることができ、勉学に専念できるようになってきました。そして、大学院に入ってから、先生方が学問の勉強を引続き指導して下さいるばかりでなく、人間としての生き方までも指導してくださっているのです。

大学の教育について申し上げますと、まず日本の大学では、制度として学生の多くの分野にわたり勉強させていると思います。大学では必修科目と選択科目が設けられるほか、一般教養科目もあります。

また、大学院の修了基準では、他の専攻、他の研究専門科目の授業も取らなければならぬようになっていまして、自分の専門以外にもいろいろ分野で勉強できます。

これは、幅広く、多角的に勉強することによって広い視野が得られ、専門分野に取組む時に、広い学問の世界の中で、自分の専門分野と他の分野の学問との関連がよく分かってくるのであります。その観点から言えば、いろいろな知識を勉強することについては、日本の大学のほうが優れています。

次に教育指導についていえば、先生は一方的に講義を

え、学生は受身的にこれをお聞きだけという一方通行的授業ではなく、学生の自発的学習をよく促がしていると思います。

大学の少人数ゼミナールで、先生が学生に自らレポートを發表させることは、非常によい勉強になると思います。学生はレポートの發表を通じて、自分の先生の学問の立場、研究方法を習うだけではなく、考え方や行動様式まで勉強し、先生と同じように学問的関心や似たような価値観を持つことが重要になり、特に先生の学問的関心に共鳴すると、さらに学習意欲が引き出されま

す。その時自分が尊敬する立派な先生に付くことは幸せと感じます。

最後に、大学教育の国際化への努力は、日本の大学教育の質的向上とつながっていると思います。いま世界各国から多くの留学生が日本に来て

いる現状に対応して、日本の大学がますます国際化への適応を迫られていると思います。

留学生たちが日本に留学する目的の一つは博士号の取得であります。ところが、日本の大学では、留学生が立派な研究成果を挙げ、博士にふさわしい論文を提出できるような指導教官のよい指導があっても、審査結果の学位授与は、アメリカより相当厳しいという話を聞きます。もしそうならば、この点の好転が切に望まれます。また、日本の特徴ある大学教育を目指すと同時に、この上にも国際的に通用するものへと変革してほしいと思います。

以上、私が日本の大学教育から感じたことは、自分の国にその成果を持ち帰ることによって自国に貢献したいと思っております。また一方、日本の大学は、留学生を受け入れることによって日本の文

化を世界に広げていることになり、私たち留学生も、自分の国の文化を日本社会に伝えて、日本国民の理解を求めることができます。留学生を通しての国際交流は、文化的に日本と世界をつなげていくことになるものと思います。

プロフィール

私は中国の北にある長春で生まれました。武漢大学卒業後、南にある貴州省に就職。一九八八年秋、日本青年会議所のお招きで、中国青年連合協会の代表として東京にやってきました。

その後、岡山大学大学院修士課程を経て、一九九一年広島大学大学院社会科学研究所博士課程に入學。商法を専攻して、現在「中国における株式制度と日本の制度との比較法」を研究しております。



中国の杭州にある「観景亭」